

酸性霧

森をむしばむ高い濃度

黒い森」という名でドイツ人に愛され、心の故郷となっている美しい森、シュバルツバルト。ドナウ河の源頭部に広がる針葉樹林の深い森が、酸性雨の影響で立ち枯れの危機に瀕していた。

八十年代の後半には被害を受けている木々が森全体の八割を超えた。墓標のごとく立ち並ぶ立枯れの木々を前に、森を守れ」、緑を取り戻せ」と地道な保護の活動が始まり、森の緑に回復の兆しが見え始めてきた。目を日本に転じると、首都圏の周辺の山々で酸性雨や酸性霧とみられる環境破壊による森林の被害が、静かに深く進行し増え続づけている。とりわけ丹沢のブナの原生林の一部の被害は目を覆うばかりである。新緑から濃緑にかわる今の時期は、森がとても美しい季節である。

その豊かな森が尾根筋の南斜面を中心に、一抱えもふた抱えもあるブナの巨木すら立枯れており、墓標のごとく天に向かってしている。

丹沢だけではない。日光国立公園の男体山でも南東斜面のコメツガなどが立枯れして白骨化しており、日光白根山や赤城山でも被害が報告されてきている。いずれも首都圏を取り巻く周辺の山々の尾根筋が多い。

森の木々が枯れるというのは複雑な原因が重なって起こるのだが、その最も重要な役割を演じているのが酸性霧、酸性雨だといわれている。自動車の排ガスや工場の煙からでる酸化物の汚染物質が、雨や霧粒に融けて降ってくる。

中でも酸性霧の酸の強さは酸性雨に比べておよそ十倍も濃い。そのうえ霧として長く空中に漂っているだけに被害をさらに大きくしている。

南関東から北上してくる汚染物質が、霧の発生とともに取り込まれ、這い上がって森に降りかかり漂う。強い酸を霧吹きで吹きかけられ立枯れした木々からの悲痛な叫びが聞こえてくるようである。